

# 古代から中世における日本の京都周辺部の疫病に関する考察

## ―疫病の発生要因と御霊信仰・祭を中心に

矢口 正樹

### はじめに

疫病<sup>1)</sup>の古い記録は、崇神天皇5年(西暦300年頃)の『日本書紀』に「くにのうち えのやまひ おほみたから ま國內に疾疫多くして、か ものあ なかばにす民死おほみたから ま亡れる者有りて、且大半ぎなむとす<sup>2)</sup>」という記載が見られる。当時、疫病の発生により、国民の多くが亡くなり、社会不安を持つ者も多くいたことが推測される。

この時代、三輪山麓の纏向周辺には都市が生まれ、それまで日本列島に存在しなかった馬具が纏向から見つかることから、大陸との交流が盛んになり始めたという。また巨大古墳を築造するため、各地から人が集められた。このように海外との交流と人口集中が、疫病の流行に影響したのではないかとされている<sup>3)</sup>。

では疫病が発生した時、人々はどうのように対応したのか。本稿では、疫病の発生要因と人々の疫病への対応について、先行研究<sup>4)</sup>をふまえ、概観する。

### 1. 疫病と人々

#### 1.1 古代都市の衛生状態

都市に人口が集中するようになると、排泄物の処理が課題となる。そのため、排泄物処理による生活環境の悪化を防ぐ上で、便所が必要になる。日本の都市における最初の便所の遺構は、藤原京から出土したと言われている<sup>5)</sup>。

平安京では便所と断定できる遺構は確認されていないが、藤原京や長岡京と同様に土坑式・水洗式の便所が混在したと考えられている<sup>6)</sup>。だが、古代平安京の住人<sup>7)</sup>は、便所が存在していたものの、路地や庭なども自然の便所として利用していた。

また、古代の都では、道路の側溝に生活排水や産業排水が流れ、ごみも捨てられていた。人々の生活に密接に関係する排泄物の処理は、地面に穴を開けたり、道路の側溝に流したりした。しかし、側溝の許容能力は十分ではないため、便所や溝は、雨水によって汚染

が広がり、地下水や河川も汚染されることもあった<sup>8)</sup>。

このように、人口の集中に伴い、不衛生な環境となった平安京では、下痢・発熱・血便・腹痛などを伴う赤痢などの消化器伝染病流行の温床になったのではないかと考えられる。

#### 1.2 人の移動と疫病

2021年の新型コロナウイルス感染症は、人の移動が感染症(疫病)の拡大をもたらすことを改めて、人類に実感させる出来事になった。古代日本においても、人の移動により、疫病が発生することがあった。

日本では人の移動との関連で持ち込まれた感染症として、天然痘<sup>9)</sup>があげられる。天然痘は、6世紀半ばに中国や朝鮮半島から来た渡来人が持ち込んだと考えられており、仏教の伝来の時期と合致する。ここでは、仏教の伝来と感染症との関連についてみていきたい。

仏教は、『日本書紀』の欽明天皇13年(552年)と『元興寺伽藍縁起』(538年)に伝来した説がある。現在、仏教の伝来は、538年説が有力視されている。だが伝来の時期に相違はあるとはいえ、『日本書紀』の記述は、仏教伝来と疫病を考える上で、重要な記載も多い。そこで『日本書紀』の記述から疫病と人の移動の関係性について、考えていきたい。

欽明天皇13年10月、百済の聖明王から「しゃかほとけ か釋迦佛の金剛像一軀・幡蓋若干・經論若干卷を獻る<sup>10)</sup>」とある。このことから、仏教が日本に伝わったことがわかる。天皇は、仏教を「ちん むかし このかた いま かつ朕、昔より來、未だ會て是の如く微妙しき法を聞くこと得ず。しか然れども朕、みつ か自ら決まじ」と述べ、群臣に礼拝の可否を聞いた。その問いに対して、蘇我稻目は「にしのとりのくに くにくに西蕃の諸國、もはら みなみやま とよあきつやまと あにひと そむ一に皆禮ふ。豊秋日本、豈獨り背かむや<sup>11)</sup>」という。蘇我稻目の意見に対し、物部大連尾輿・中臣連鎌子は、「わ みか ど あめのした きみ つね あまつやしろ我が國家の、天下に王とましますは、恆に天地

社 稷の百八十神を以て、春夏秋冬、祭拜りたまふ  
 ことを事とす。方に今改めて、<sup>わざ</sup> <sup>まさ</sup> <sup>いまあらた</sup> <sup>あたしくにかみ</sup> <sup>をが</sup> 蕃神を拜みたまは  
 ば、<sup>おそ</sup> <sup>くにつかみ</sup> <sup>いかり</sup> <sup>いた</sup> 恐るらくは國神の怒を致したまはむ<sup>12)</sup>」と反  
 対した。しかし、天皇は、「<sup>ね</sup> <sup>が</sup> <sup>ひといぬ</sup> <sup>すくね</sup> <sup>さづ</sup> 情願ふ人稲目宿禰に付  
 けて、<sup>こころみ</sup> <sup>みやま</sup> <sup>をが</sup> 試に禮ひ拜ましむべし<sup>13)</sup>」と述べ、礼拝す  
 ることを許し、「<sup>をはり</sup> <sup>だ</sup> 小墾田の家」に仏像を安置するこ  
 とを許した。しかしこの後、「<sup>くに</sup> <sup>えやみ</sup> <sup>おこ</sup> 國に疫氣行りて、  
<sup>おほみたらあからしにしめること</sup> 民天<sup>を</sup> 殘を致す<sup>14)</sup>」事態となったという。

仏教の伝来後、疫病が日本国内に流行したことから、  
 物部大連尾輿・中臣連鎌子は、「<sup>いむさきやつかれ</sup> <sup>はかりこと</sup> <sup>もち</sup> 昔日臣が計を須  
 ゐたまはずして、<sup>こ</sup> <sup>やみしに</sup> 斯の病死を致す。今遠からずして復  
 らば、<sup>まさ</sup> <sup>よろこび</sup> <sup>あ</sup> 必ず當に慶有るべし。早く投げ棄てて、<sup>す</sup> <sup>ねむころ</sup> 懃  
 に後の<sup>さいはひ</sup> <sup>もと</sup> 福を求めたまへ<sup>15)</sup>」と意見した。それに対し  
 て、天皇は「<sup>まう</sup> <sup>まま</sup> 奏す依に」と述べた。その結果、役人は、  
 仏像を難波の堀江に流し捨てた。また火を伽藍に付け  
 たという。

仏教伝来から、数十年後の敏達天皇13年(584年)  
 に「<sup>くだら</sup> <sup>まうけ</sup> <sup>かふかのおみ</sup> <sup>みろく</sup> <sup>いしのみかたひとはしらたも</sup> 百濟より来る鹿深臣、彌勒の石造一軀有て  
<sup>さへきのむらじ</sup> <sup>ほとけのみかたひとはしらたも</sup> り。佐伯連、佛像一軀有てり。<sup>16)</sup>」とあることか  
 ら、計2体の彌勒石像が百濟よりもたらされたことが  
 わかる。

蘇我馬子宿禰(蘇我稲目宿禰の子)は、2体の彌勒  
 石像をもらい、<sup>くらつくりのすぐりし</sup> <sup>めだちと</sup> <sup>いけへのあたひ</sup> <sup>ひた</sup> 鞍作村主司馬達等と池邊直永田を  
 四方に遣わして、修行者を探させた。播磨国に僧で還  
 元した高麗の惠便という人を見つけた。蘇我馬子宿禰  
 は、惠便を仏法の師とした。敏達天皇14年(585年)、  
 春2月15日、蘇我馬子宿禰は、塔を大野丘の北に建て  
 て、法会の設齋を行った。2月24日、蘇我大臣(蘇我  
 馬子宿禰)が病気になった。卜者に問うと、「<sup>かそ</sup> 父の時  
 に<sup>まつ</sup> <sup>ほとけ</sup> <sup>みこころ</sup> <sup>たた</sup> 祭りし佛神の心に祟れり」と言われた。天皇は  
 「<sup>うらべ</sup> <sup>こと</sup> <sup>よ</sup> 卜者の言に依りて、父の神を<sup>いは</sup> <sup>まつ</sup> 祭り祠れ」という。大  
 臣は、詔に従い、石像を礼拝し、寿命を延べたまえと  
 乞うた。この時、「<sup>くに</sup> <sup>えやみ</sup> <sup>おこ</sup> 國に疫疾行りて、<sup>おほみたらし</sup> <sup>ものおほ</sup> 民死ぬる者衆  
 し」というありさまだった。3月1日、<sup>ものへのゆげのもりや</sup> 物部弓削守屋  
<sup>おむらじ</sup> <sup>なかとみのかつみのまへつきみ</sup> 大連と中臣勝海大夫は、「なぜ、私たちが申し上げ  
 たことを用いてくれないのか。欽明天皇から陛下の代  
 に至るまで、疫病が流行し、国民が死に絶えそうなの  
 は、蘇我臣が仏法を広めたことによるものだ」と言っ  
 た。それに対して、天皇は「このことは明白なので、

仏法をやめよ」と言われた。そこで、<sup>ものへのゆげのもりや</sup> 物部弓削守屋  
<sup>おむらじ</sup> 大連は、自ら寺に赴き、仏像と仏殿を焼いた。焼け  
 残った仏像も、難波の堀江に捨てさせた。この時、天  
 皇と<sup>ものへのゆげのもりやおむらじ</sup> <sup>かさ</sup> 物部弓削守屋大連は、瘡(疱瘡、天然痘とみら  
 れる)に冒された。また瘡で命を落とす者が国中にあ  
 ふれかえった。瘡を病む者が、「身、焼かれ、打たれ、  
<sup>くだ</sup> 摧かるるが如し」と言って、泣き叫びながら命を落と  
 した。老人も若者もひそかに語り合い、「<sup>これ</sup> 是、佛像焼  
 きまつる罪か」と言った。6月、蘇我馬子宿禰は、  
 「<sup>やまひおも</sup> 臣の疾病りて、今に至るまで<sup>い</sup> <sup>さむぼう</sup> 愈えず。三寶の力を  
<sup>かうぶ</sup> 蒙らずは、救ひ治むべきこと難し」という。それに  
 対して、天皇は蘇我馬子宿禰が一人で仏法を行うこと  
 を許したが、他の人には崇仏を禁止した。8月15日、  
 敏達天皇の病が重くなり、崩御された<sup>17)</sup>。

ここでは『日本書紀』を頼りに、人の移動と疫病の  
 発生についてみてきた。仏教伝来の時期としては『元  
 興寺伽藍縁起』の538年が有力ではあるものの、『日本  
 書紀』の記述は、人の移動が疫病をもたらしたのでは  
 ないかと考える根拠の一つとなるのではないかと。  
 『日本書紀』では、仏教伝来と疫病を結び付けて考え  
 ているが、そもそも仏教をもたらしたのは人であり伝  
 播するの人も人である。そのため、人が動くと疫病発生  
 の原因になる。天然痘についても、中国・朝鮮半島の  
 人々が保菌しており、日本列島に渡来し、人々と交流  
 することで最も近くにいた人が感染し、そして伝播し  
 たのではないかと考えられる。だが、当時の日本で生  
 活した人々は、疫病の発生要因等を知る由もないため、  
 人から人へという視点よりも、仏教という異国の宗教  
 が事態をもたらしたと考えたのだろう。

## 2. 疫病と祭

### 2.1 疫病と御霊信仰

疫病と御霊信仰はどのように結びつくのか。ここで  
 は疫病と御霊信仰との結びつきについて考えていき  
 たい。御霊信仰は、非業の死をとげた人物の霊を祀って  
 天変地異を鎮めようとする信仰である。またこの信仰  
 により鎮魂の行事となるものが、御霊会である。

御霊信仰は人間の霊に対する信仰で、発生の前提は  
 個人霊の成立という状況が必要である。なお、個人霊

の信仰対象となる最大の要素は政治性である。律令制以前では、個人の政治活動は氏族団体の中に吸収・埋没してしまうため、信仰の対象になる個人霊は存在していなかった。だが、律令社会になると個人霊が発生し、御霊が成立する可能性が出てくる。御霊は政治家や民衆に対して発生し、個人霊が悪・祟りをなしているという認識と事実があって、御霊は神として祀られることになる。御霊は人間との関係において成立し、疫病などが起きた結果、そこから御霊が生み出される。そのことから、御霊は結果であり、原因ではないことがわかる。また御霊信仰は、疫病流行後、悪・祟りと認識し、その解消のため、御霊を奉祀するというサイクルで成立するという<sup>18)</sup>。

疫病と御霊信仰との関わりは、早良親王の怨霊から始まる。それは、早良親王の死後、日照りによる飢饉や疫病が流行した。さらに、桓武天皇の夫人や皇后、天皇の近親者の死が相次いだため、その原因を陰陽師に占わせた。その結果、早良親王の怨霊が原因ということになり、早良親王の怨霊を鎮める儀式が行われた。また延喜元年（901年）の左大臣藤原時平の策謀により、菅原道真が太宰府に左遷され、太宰府で亡くなった事件後、延喜8年（908年）、菅原道真の弟子、藤原菅根が雷に当たって死亡した。藤原菅根は、師である菅原道真の失脚に加担した人物だった。さらに延喜9年（909年）、菅原道真を不幸に追いやった藤原時平が急死した。この頃から洪水、長雨、干ばつ、伝染病などが起こるようになり、菅原道真の霊ではないかと噂された。このように、早良親王や菅原道真のように政治家が霊となり、疫病や災厄とが結びつけられるようになったことがわかる。

## 2.2 疫病と祇園祭

御霊信仰の誕生により、御霊と鎮魂する行事である御霊会が誕生する。京都では、祇園社（八坂神社）の祇園祭が有名である。祇園祭は疫病を鎮圧・制御する牛頭天皇を祀った。

祇園社の創始については久保田収<sup>19)</sup>氏の詳細な研究があるので、この研究をもとに概要を述べたい。

祇園祭の創始は、『祇園社本縁録』『二十二社註式』

『社家条々記録』『年中行事秘抄』の史料に記載がある。まず第1に、『祇園社本縁録』には次のような記載がある。貞観11年（869年）に疫病が流行したとき、卜部日良麻呂が6月7日に66本の矛をたて、6月14日に洛中の男児と郊外の百姓が神輿を神泉苑に担いで行き、祭は終わったという。以来、これを祇園御霊会といい、同年から毎年、6月7日と14日に行うのを恒例とした。しかし、この説は、祇園社の鎮座が貞観18年（876年）とされていることから、信憑性が薄い。だが、祇園祭がもともと矛と関連性を持ち、疫病と結びついていること、祭の時には神輿を担いでいたことなどは、祭の本質的形態を語っている。第2に、『二十二社註式』には、「圓融院天禄元年六月十四日、始御霊会、自今年行之。」との記述がみられる。円融天皇の時代である天禄元年（970年）に、はじめての御霊会が行われるようになったことが読み取れる。第3に、『社家条々記録』には、「天延二年六月十四日、被始行御霊会」と記されている。第4に、『年中行事秘抄』には、「天延三年六月十五日、祇園御霊会始」と記されている。

以上のように、祭の創始には諸史料によって、いくつかの説があるものの、社の鎮座が貞観18年（876年）であるから、祭の創始はその後でなければならず、したがって、天禄元年（970年）・天延2年（974年）・天延3年（975年）のいずれかとなる<sup>20)</sup>。そのことから祇園祭は、10世紀後半に始まったと考えるのが妥当である。

祇園祭では、疫病を鎮圧するために、<sup>ちがや</sup>茅という剣のように鋭く丈夫な植物が用いられた。現在でも、茅は、茅輪という茅を輪にしたものや、<sup>ちまき</sup>粽にその名残を残している<sup>21)</sup>。おそらく、疫病を鎮圧するために茅を用いたのは、武器のように鋭い植物であったためであろう。後にのべるが、武器には邪気を払う効果があったとされているからである。

疫病を鎮圧・制御する神として、祇園社では牛頭天王が祀られている。牛頭天王は、武塔神とも、素戔鳴尊とも同一視されている。その守護神に関する説話として、『釈日本紀』の中に記されている「素戔鳴尊乞宿於衆神」があげられる。「素戔鳴尊乞宿於衆神」には次のように記されている。

北の海に坐す武塔神は、南の海の女性のもとへ行く途中に日が暮れてしまった。途中に立ち寄った場所には、蘇民将来兄弟が住んでいた。兄はとても貧乏であったが、弟は生活が豊かであった。武塔神は弟に宿を借りようとしたが、弟は惜しんで宿を武塔神に貸さなかった。それに対して、兄は武塔神に宿を貸し出し、粟飯をふるまった。数年後に武塔神は八柱の子を率いて来訪し、兄の家族には茅輪を腰の上に着けさせ、弟の家族は滅ぼしてしまった。そして、武塔神は、「速須佐雄能神」と名乗り、後世に疫病が流行したときは、「汝蘇民将来子孫」と言い、茅輪を腰の上に着ければ、疫病を免れることができるだろうと伝えた<sup>22)</sup>。

このことから牛頭天王は、疫病をつかさどる力を持つことがわかるとともに、茅輪を用いることで、疫病から免れることができると当時の人々が考えるにいたる経緯が読み取れる。また蘇民将来の兄が武塔神に粟飯をふるまっていることから、もてなすという行為で共存をはかり、疫病を遠ざけようとする様子が伺える。そのことから、疫病と共存していくという意識、さらには疫病の神をもてなすことにより、災厄から逃れることができると考えていたことがわかる。

最後に祇園祭について概観していく。祇園祭は、山鉦巡行が重要な役割を占めている。『本朝世紀』の「長保元（999）年6月14日」の記録には、祇園祭の当日、京中に法師形の雑芸者である无骨が雑芸をおこなっていたことが記されている。また大嘗会の標山を参考にして作製した物を祇園祭の当日に引いていた。翌年の「長保二（1000）年6月14日」には、祇園御霊会の御輿を担いだ後に、散楽空車を引き、空車の上で散楽を興じていたことが記されている。このことから、祇園祭は疫病の神をもてなし、歓待することで疫病の神が猛威をふるわないようにという願いがこめられていたことがわかる。また上述のとおり、人々が疫病と共存しようとしていることが伺える。

### 2.3 犬神人と祇園祭

犬神人は、大山喬平氏<sup>23)</sup>や脇田晴子氏<sup>24)</sup>も指摘しているように、『立正安国論』の元仁年中（1224年11月20日から1225年4月20日）に姿を見せる。『立正安

国論』によれば、犬神人は法然の墓所を破却したようである<sup>25)</sup>。このことから、犬神人は穢れを払う、清めることを中心とした職掌を担っていたことが伺える。

犬神人の呼称は、喜田貞吉氏<sup>26)</sup>によれば、「もともと社内外の掃除警固の任に当たった卑賤のものであったから、天皇の宮墻を護る隼人を日本紀に『狗人』と書いてあるが様に、番人の積もりで之を犬神人と呼んだ」（原文のまま）という。喜田氏の犬神人の呼称は史料にもとづいた考察であると思うが、別の視点から犬神人の呼称について考えていきたい。私は、犬神人の犬には、神人とは異なるものという意味がこめられたのではないかと考えている。では、何が異なるのか。私は、神人との職掌の違いから犬という文字が加えられたのではないかと考える。そもそも神人は、豊田武氏<sup>27)</sup>の研究からも明らかなように、綿本新両座・材木座・魚座・柑類座・小袖座・絹座・腰袴座というような形で、商業経済的に神社と関わりを持ち、販売権などを得ていた。それに対して、犬神人は、神人とは異なり、商業や経済の面とは違った形で祇園社に関わっていたのではないかと考える。ではどのような職掌に携わっていたのだろうか。犬神人の職掌をもとにみていきたい。犬神人の職掌は、地子未進の者に対する催促、住宅破却、建築物の修理、穢物の取り片付け、掃除、葬送、警固、祇園祭の神役などであった<sup>28)</sup>。これを見ると、商業経済的な神人とは異なる役割を担っていたことがわかる。そのことから神人と同一視しないという意味で、犬という文字が付けられたと考えられる。

さて、祇園社に対してこれらの職掌で携わった犬神人だが、それぞれの職掌の役割をみていきたい。住宅破却については、地子未進の者や殺害人に対して行われた。掃除については、梶井門跡で犬神人が掃除を行ったことや座主宣命が近くなり、犬神人が掃除を行ったことが記されている。穢物の取り片付けについては、犬が死人の足を食べて社内に入ったため、犬神人に取り捨てさせたという記述が史料にみられる。犬神人が死人の足を取り捨てたものの、穢れてしまったため、7日間、神事ができなくなったとある<sup>29)</sup>。大山氏によれば、穢れは二つに規定される。一つは穢れの発生と伝播に関する甲乙丙丁の区別を規定すること、二つ目

は、穢れの消滅に関する日数の限定を規定することである<sup>30)</sup>。このことから、穢れは拡散していき、穢れが消滅するには、ある一定の日数がかかることがわかる。警固については、神事等でおこなっていたようである。葬送については、犬神人が権利を主張している。『八坂神社文書』<sup>31)</sup>によれば、遁世者が伏見で葬送を行ったため、犬神人が厳しく咎めていることが記されている。ここから、葬送に関する職掌の利権を主張していることが読み取れる。このことは、日本社会における座との関連で考察すると興味深い記述であり、犬神人が職掌の利権を組織として主張していることがわかる。祇園祭の祭礼については、「四条以南五條以北河原田畠<sup>32)</sup>」を社恩として与えられたことで、祭礼や神事に犬神人が従うようになった。犬神人は祇園祭の時、社頭の警固や掃除、神事に従っていたようである。また時代は下るが、「御とものきしき、御さきへはいぬひしにんまいる、その跡ハおもひおもひの願主」とある。このことから、犬神人が先導していることがわかる。また犬神人は祇園祭の山鉦を先導する際、矛を持っていたようである。武器を持ち、武装することは邪気を祓う呪術的効果があると考えられていたようである<sup>33)</sup>。

## おわりに

本稿では、疫病の発生要因を概観した後、疫病と御霊信仰との関係、祇園祭と疫病との関係について考察した。以下、本稿で概観した内容について記す。

- ①衛生事情と疫病の関係は、都市の人口集中と便所の利用方法から考察した。その結果、都市には赤痢などの消化器伝染病が発生した。
- ②人の移動と疫病の関係は、仏教との関係から考察した。その結果、当時の人々は仏教という異国の宗教が疫病をもたらしたと考えていた。しかし、仏教が疫病をもたらしたと考えるよりも、仏教を日本に伝えた渡来人が保菌していたため、日本に疫病が流行したと考えるべきだろう。いわば人と人との交流が疫病をもたらすことになった。
- ③疫病と御霊信仰の関係は、御霊は疫病などが起きた結果、生み出されることを述べた。また疫病流行後、それを悪・祟りと認識して、御霊信仰が行

われたことを考察した（御霊信仰の例としては早良親王や菅原道真などがあげられる）。

- ④疫病と祇園祭の関係は、疫病の神をもてなし、歓待することで、疫病の神が猛威をふるわないようにという願いから祇園祭が行われたことを述べた。また人々が祇園祭を通じて、疫病と共存しようとしていることを明らかにした。
- ⑤祇園社の犬神人と祇園祭との関係について考察した。犬神人は、地子未進の者に対する催促、住宅破却、建築物の修理、穢物の取り片付け、掃除、葬送、警固、祇園祭の神役などの職掌を行った。その中でも祇園祭と犬神人の関係は、祭りの際の社頭の警固や掃除、神事に従っていたという。また祇園祭の際、山鉦を先導する際、武器を持ち、武装することで邪気をはらう職掌を担っていたことを明らかにした。

最初へのべたとおり、日本で始めて疫病の記述がみられたのは、崇神天皇5年である。記述がみられる前にも疫病は人々を苦しめたと考えられるが、一貫していることは、人類の歴史には常に疫病との戦いがつきまとうことである。日本では古来、疫病に対して、祭という方法で共存しようとしていた。それが現在、衛生体制や都市空間、医療技術が発展し、疫病（感染症）の向き合い方も変化してきた。だが2021年の新型コロナウイルス感染症のように、人類は疫病（感染症）の脅威を拭い去ることはできない。そのことから、今を生きる私たちの疫病への向き合い方が未来を生きる人たちへの道しるべになるのではないかと思う。

## 注

- 1) 疫病は、多くの人々の病気でも一般的なものを目指し、人々の生活の中で流行し、多くの人々を苦しめるものであった。また疫病が発生することにより、人々の社会的発展を妨げ、疫病による影響は、政治や経済の状態に対しても大きな変化を及ぼす。疫病は、風土病・地方病、流行病、大流行病というようにそれぞれの地域や発生状況に応じて呼び方が異なる。風土病・地方病はある一定の土地や生活状況、気候・風土を持つ地域に発生する病気であり、時期

の区別はなく発生する疫病であり、流行病は一定の地方に時期を別にして突如として発生する疫病であり、大流行病は流行病の度合いの高いもので、全国的に広がり、多くの人々を不幸のどん底へと陥れる疫病である。疫病に対する方法は、禁圧と巫呪による方法、屠蘇酒という薬品を用いて疫病を防ぐ方法、雄黄・香油・焼酎などの薬品を鼻竅の中に塗り、あるいは蒜頭を鼻の中に入れて疫病の伝染を防ぐ方法、蠅を追い払って疫を取り除く方法、疫病で悩んでいる人々を遠く人家より離れた所に送る方法がある（富士川游『日本疾病史』平凡社、1968年）。

- 2) 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋編『日本書紀上 日本古典文学大系67』岩波書店、1967年、238頁。
- 3) 磯田道史『感染症の日本史』文藝春秋、2020年、44頁。
- 4) 磯田道史『感染症の日本史』文藝春秋、2020年。  
五味文彦『疫病の社会史』株式会社KADOKAWA、2022年。酒井シヅ『病が語る日本史』株式会社講談社、2008年。肥後和男「平安時代に於ける怨霊の思想」（『史林』第42巻、第1号）史学研究会、1939年。  
富士川游『日本疾病史』平凡社、1968年。村山修一『日本都市生活の源流』関書院、1953年。
- 5) 董科「古代日本における異常気象・都市生活環境と疫病流行について—平安京を中心に—」（『東アジア文化交渉研究』第7号）、2014年。
- 6) 黒崎直「日本古代の都市と便所—考古学からみた古代のトイレ—」（『歴史評論』590号）、1999年。
- 7) 平安京の人口は、平安時代前期で9万人程度、9世紀では12万人だとされている（井上満郎「平安京の人口について」（『京都市歴史資料館紀要』第10号）1992年。
- 8) 金原正明・金原正子「コラム：古代日本の都市の衛生問題」（金関恕・川西宏幸編『講座 文明と環境 4 都市と文明』朝倉書店、1996年）。
- 9) ポックスウイルス科オルトポックスウイルス属の天然痘ウイルスによる感染症である。紀元前1100年代に死亡したエジプト王朝、ラムセス5世のミイラに天然痘の痘痕が認められており、これが天然痘で

死亡した最古の例とされる。天然痘は感染力が強く、致命率も高いことから、それまで発生のない地域に持ち込まれた場合、大きな損失を与えた（田島朋子「地上から消えた病気、消えない病気」（『家畜感染症学会誌』2巻3号、2013年）。

- 10) 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋編『日本書紀下 日本古典文学大系68』岩波書店、1965年、100頁。
- 11) 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋編『日本書紀下 日本古典文学大系68』岩波書店、1965年、100頁。
- 12) 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋編『日本書紀下 日本古典文学大系68』岩波書店、1965年、100頁。
- 13) 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋編『日本書紀下 日本古典文学大系68』岩波書店、1965年、100頁。
- 14) 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋編『日本書紀下 日本古典文学大系68』岩波書店、1965年、100頁。
- 15) 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋編『日本書紀下 日本古典文学大系68』岩波書店、1965年、100頁。
- 16) 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋編『日本書紀下 日本古典文学大系68』岩波書店、1965年、148頁。
- 17) 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋編『日本書紀下 日本古典文学大系68』岩波書店、1965年、148頁-153頁。
- 18) 井上満郎「御霊信仰の成立と展開—平安京都市神への視角—」（『奈良大学紀要』第5号）、1976年。
- 19) 久保田収『八坂神社の研究』神道史学会、1974年。
- 20) 久保田収『八坂神社の研究』神道史学会、1974年、59頁～64頁。
- 21) 7月16日の宵山の時、山鉾の下で、浴衣の子供達が浴衣姿で厄除けの粽を売っている。山鉾巡行の際にも、山鉾を留めて山鉾の上から人々に向かって粽が投げられた。京都の人々は、粽を玄関の鴨居にかけて、一年の除災招福を願った。

- 22) 素戔鳴尊乞宿於衆神（『釈日本紀』）。
- 23) 大山喬平『日本中世農村史の研究』岩波書店、1978年。
- 24) 脇田晴子『日本中世被差別民の研究』岩波書店、2002年。
- 25) 日蓮（田村完誓 訳）『立正安国論』徳間書店、1973年。
- 26) 喜田貞吉「つるめそ（犬神人）考（上）」（『社会史研究』（『民族と歴史改題』第9巻4号），1922年。  
喜田貞吉「つるめそ（犬神人）考（中）」（『社会史研究』（『民族と歴史改題』第9巻5号），1922年。  
喜田貞吉「つるめそ（犬神人）考（下）」（『社会史研究』（『民族と歴史改題』第9巻6号），1922年。
- 27) 豊田武「座と土倉」（『岩波講座 日本歴史 中世2』）岩波書店、1963年。
- 28) 観応三年二月廿八日（「祇園執行日記」『京都の部落史3』），正平七年閏二月廿八日（『八坂神社記録1』），正平七年四月十七日（『八坂神社記録1』），観応三年八月廿三日（「祇園執行日記」『京都の部落史3』），文和元年十二月十六日（「祇園執行日記」『京都の部落史3』），正平七年十二月十五日（『八坂神社記録1』），正平七年閏二月廿五日（『八坂神社記録1』），正平七年二月一日（『八坂神社記録1』），正平七年二月四日（『八坂神社記録1』），正平七年正月廿六日（『八坂神社記録1』），感神院申状案（『八坂神社文書』下，1333号）。
- 29) 正平七年閏二月廿五日（『八坂神社記録1』）。
- 30) 大山喬平『日本中世農村史の研究』岩波書店、1978年。
- 31) 犬神人等申状案（『八坂神社文書』上，1246号）。
- 32) 感神院申状案（『八坂神社文書』下，1333号）。
- 33) 新井孝重『悪党の世紀』吉川弘文館，1997年。

## **A study on epidemics in and around Kyoto, Japan from ancient times to the Middle Ages**

Focusing on the causes of epidemics, spiritual beliefs, and festivals

YAGUCHI, Masaki

In this paper, after giving an overview of the causes of epidemics, we consider the relationship between epidemics and faith in spirits, epidemics and the Gion Festival, and the Inuzinin and the Gion Festival. As a result, we found that the outbreak of epidemics is related to the sanitary conditions of cities, and that the movement of people from outside Japan is related to epidemics. We also found that faith in spirits was born after epidemics, and that festivals such as the Gion Festival began to be held. The Gion Festival aims for people to coexist with epidemics by entertaining the god of epidemics, and it is interesting to note that during this festival, people known as Inuzinin stood at the head of the Yamahoko floats and were responsible for exorcising evil spirits.